

東洋史研究

新第一卷
通卷第九號
第五六號
昭和二十二年四月發行

アメリカの東洋學界につき

石 濱 純 太 郎

長い戦争の間我國は孤立して戦つてゐたから、各國の東洋學界の情態は殆んど我等には分らなくなつてしまつた。ここに米國軍の我國進駐となつたので、米國の東洋學を少しく顧てみようと思ふのであるが、自分には參考になるものが手元がない。そこで先づいつでも最初に津を問ふの書としてゐる杜村石田幹之助先生の「歐人の支那研究」(現代史學大系第八卷、昭和七年東京刊)を見ると、巻尾二六二頁にグウドリッチ、ラトウレット、カタア、マアチなどを擧げてあつたが、皆之等を見るを得ない。尤もラトウレットの一文(K. S. Latourette: American Scholarship and Chinese History. Journal of the American Oriental Society, Vol. 38, Part 2, April 1918)は見るを得たが、杜村先生舉示のものより古いからどうかと思はれる。次に同じく先生の「歐米に於ける支那研究」(昭和十七年東京刊)を見ると、到る處に米國の中國研究の情態が述べてあつて大に教へられた。然し考へて見ると我國で云ふ東洋學は主として中國中心に見たものであるが、歐米の云ふ東洋學は西南アジア地方

を大宗としてゐるから、今度は平凡社の「世界歴史大系」を一閲してみた。第一巻の「史前史」(昭和九年東京刊)にも、第十四巻「西洋古代史」第一篇(昭和八年東京刊)にも研究調査の記事の少いのは、通史の體裁の致す所だが、第二巻「東洋考古學」(昭和九年東京刊)には文獻も擧げて各國の調査研究を述べてあつた。ヒルプレヒトの著は見るを得ないが、同じ様な標題を持つブゼスクルの「古代史地方の十九世紀及び二十世紀初頭の發見」(V. L. Buzeskul : *Otkrytiia XIX i nachala XX veka v oblasti istorii drevnego mira. I. Vostok. Peterburg, 1923*)を偶々檢するを得た。「ニップウルに於けるアメリカ人の發見」などの章はあつても、元來國別のものでないから簡單にアメリカのみを概觀するわけにはいかなう。その點から云へば簡單過ぎるとしてもシュミットの講演(Nathaniel Schmidt : *Early Oriental Studies in Europe and the Work of the American Oriental Society, 1842-1922. JAOS, vol. 43, Part 1, 1923*)は大觀するに値す。アメリカ東洋學界の母體と見てゐるのであるから。尚ほかかるアメリカ東洋學會の大會に於ける座長講演(Presidential Address)を二つ三つ見るを得たから、上記の書にそれ等を讀んで併せ得た所感を書いてみたい。それ等の講演は次の通りである。

C. C. Torrey : The Outlook for American Oriental Studies, JAOS, vol. 38, Part 2, 1918.

J. H. Breasted : The Place of the Near Orient in the Career of Man and the Task of the American Orientalist, JAOS, vol. 39, Part 3, 1919.

C. Adler : East and West, JAOS, vol. 44, number 3, 1924.

Julian Morgenstern : American Culture and Oriental Studies, JAOS, vol. 48, num. 2, 1928.

Berthold Laufer : Columbus and Cathay, and the Meaning of America to the Orientalist, JAOS, vol. 51,

元來アメリカ合衆國は新しい國家であつて、その祖國は舊歐洲なのであるから、國家としての目覺ましい發展は驚くべきものがあつても、何かの傳統を求めるとすると、それは舊歐洲の傳統を紹述してゐるのは當然である。だから東洋學の傳統も固り歐洲を承けてゐる。アメリカに東洋學が創建された時は歐洲に學會が創立された時で、早速にこれに倣つてアメリカ東洋學會を創立したんだが、其國に傳統があるのでないから、一八二二年のフランスのアジア學會 (Société Asiatique) 一八二三年イギリスの王立アジア學會 (Royal Asiatic Society) についで一八四二年に創建し、一八四四年のドイツの東洋學會 (Deutsche Morgenlandische Gesellschaft) には先立つて居り、既に近代アメリカ様式を豫見せしめてゐる様だ。又當時の歐洲學風を承けてサンスクリットとセム語族の研究が中心をなした様である。當時のアメリカとしてはセム語族は宗教上の關係もあらうが、梵語は何等の世間的因縁はなからうから、全く歐洲傳統の紹述に外ならない。其後と雖も學者の留學は歐洲へであり、教授の招聘は固り歐洲からであるから、全く歐洲傳統の移入であつた。さうして何もかも難然たる移入を以て豊富になつて行つた。固り本國に於てもホイットニイ (William D. Whitney) の如き天才學者の後を承くる幾多の俊才が印度語學印度文學のみならず、延いてペルシアの語學文學まで及んだし、セム語族の諸方面も亦廣く開拓されて行つた。學會も専門分科が續々と設立された。一八六九年にホイットニイ自身が言語學會 (American Philological Association) を立てたのを初めとして、考古學會 (Archaeological Institute of America) は一八七九年に聖書學會 (Society for Biblical Literature and Exegesis) は一八八〇年に、歴史學會 (American Historical Association) は一八八四年にと出來て行つたのであつた。研究所もいくつも出來て行つた。ただ注意すべきは建國の

初期には有力であつた英佛の傳統も政治情勢の變遷と共にドイツの學術が漸次勢力を持つに至つた事であらう。能率を尙ぶ國風はドイツの科學的研究法を支持し之に刺戟されたものであらう。然しこれ亦歐洲の傳統に外ならない。

研究設備が揃つてくると資料蒐集の爲め諸方へ探檢隊が派遣されるやうになつた。これも歐洲の傳統をついで、續く新發見で學界を瞠目せしめつあつた西南アジア地方アッシリア・バビロニアの故地に着目したのであつた。注意してもいいと思はれるのは、以前の東洋學は印度のサンスクリットにしても、セム語族のアラビア語へブライ語等にしても、その子孫の近世語が存在してゐるので、古代語であつても研究の手掛りのないものではないのであつたが、アッシリア・バビロニアでは全然子孫が絶えてゐるらしかつた言語を表はした不明の楔形文字や象形文字が出土してきたのであつた。歐洲學者の不撓不屈の研究は漸次之を解讀するに至つたのであるが、何萬に上る泥磚文書は次ぎから次ぎへと新しい未知言語を發見せしめるべく出土して行つた。さうしてこの怪奇なる文書が舊約聖書の傳説を解明して行くのである。この學問こそは歐洲の傳統を承けてはゐるが、その傳統の重壓から逃れて新しい廣い國に渡つて未明の地域を開拓して行けば行く程幸福になり得たアメリカの風望と似てはゐないだらうか。況んや研究費を出し得る點に於ては群を絶する。ほんとに自由に理想を追求し得るのである。その豊富なる資料の點は探檢隊の上にも現はれてゐる。最初は大學などの方から出かけないで、他の探檢隊の後援から始まつたが、終には大學独自の探檢隊となつて大收獲を獨占する事となる。例へば一八八四―五年のウォオドのメソポタミア探檢なんかもあるが、一八八八―九年のニップウル探檢隊はペンシルヴァニア大學の後援の下に行はれ、引續き數回に及び、一九一八年からは大英博物館とペンシルヴァニア大學とが協力してウル地

方の發掘をなし、一九二八年には英米の合同探査隊のパレスチナ踏査となり、一九二七年以來はシカゴ大學及びペンシルヴァニア大學は夫々探檢隊を派出して各地に活躍してゐると云ふ調子である。もうかうなると、アメリカ建國當時の意氣「我等はアメリカ人なり、イギリスの殖民にあらず」と云ふが學術界に於ても完成したと見てよい。歐洲傳統から愈々獨立したと見てよく、まさしくジイグフリイドの云ふ「アメリカ時代」となつてゐる。ジイグフリイドなどを擔ぎ出したが、實は André Siegfried: *The American Age*. (The Kawase Series, Contemporary Essays, 3rd Edition, Kobe, 1939.) を讀んだだけで甚だ濟まない事を斷つて置かう。

探檢隊は勿論西南アジア地方だけでない。歲月を経るに隨つて世界の各地方へどんどん派遣されて各科學分科の尨大なる資料が將來されて行つた。アンドリウス (Roy Chapman Andrews) の三回に渉るアジア探檢などは最もアメリカ時代の氣風を現はしてゐる例としてよからうか。到底舊歐洲の探檢隊などの比ではない。既にアンドリウス自身が探檢は舊様式を脱却して新しいやり方で爲されねばならないと宣言してゐるのでも分る。未開拓の蒙古を目的地とし、二十五萬弗の豫算の下に、五箇年の歲月を豫想し、二十一人の各種専門家の隊員により、自動車を始めあらゆる新式資材を準備し、周到なる準備工作を檢討した上で、現地に於ける研究生活を凡て何等の苦痛不安冒險なく實行し得る方法を探つて之を行つた。且つ此の探檢の實用目的までも科學的眞理發見以上に教育修養及び人類幸福に何と與へ得るかの點に迄及んでゐる。それ等に關する彼の探檢論（下記の彼の著の初めの方を見よ）を讀んでゐるとエヴァレットの「青年訓」(C. C. Everett: *Ethics for Young People*) を想起せざるを得ない調子であつた。又濟まない譯であるがこのアメリカ青年訓も余は長谷川康譯註の講義の北星堂の普及版昭和十二年三十八版と云ふ學生受驗用本で讀んだに過ぎないのである。通俗倫理談であるが「アメリカ時代」の考

へ方、氣風、道德のよつて立つ所をよく示してゐると思ふ。さうしてこれ等の準備に就いても、又結果に就いても、新聞雜誌の宣傳を利用したのであつて、雜誌「アジア」の編輯者なんかはハッキリとこの探検隊は新しい鋼鐵工業會社の創立に劣らざる大起業 (big-business) であると云つてゐるのは面白い。それ等については抄出する必要もなく、R. C. Andrews : *On the Trail of Ancient Man. A Narrative of the Field Work of the Central Asiatic Explorations*, New York and London, 1926. 〇 I. preparations 〇 頃か、Louis D. Froelick : *Andrews of Mongolia. A Look behind the Scenes into the Business of Exploring Asia*, August 1924. を讀んで貰へばよく分る。まさに「アメリカ時代」の探検である。

宣傳と云ふと想起するが、座長講演なんかでも東洋學を廣く通俗化し閑職の老人に對してばかりでなく、若い青年男女にも興味と利益を與へねばならないと云ふ風なのがあつた。然しそれも唯會員獲得によつて不振を打解すると云ふばかりではないので、東洋の語學文學の研究によつて國際理解による永久平和の將來を、又それによつて行きづまつてゐる舊歐洲精神文明の躍進を、又それによつて未だ完成に至らないアメリカの精神文明の營養に寄與を、又それによつて國家の活躍にも貢獻をしようと云つてゐる。かう云ふ點に至れば我等がアメリカを理解し得るに好きヒントを與へうるのでないだらうか。又且つ我等もこれを他山の石として反省すべき多くのものがあるのではないだらうか。平心に彼等諸君の言説を理解せねばならない。

アッシリア・バビロニア學に重點を置いたアメリカ東洋學は東に西に擴がつて行つてゐるが、ここを最古の據點として文化が傳播して遂にアメリカインデアンに及んだと見てゐるやうで、結局自國原住民の研究の結果は東洋學に比較せざるを得なくなつた點もある様だ。現代が世界史中の世の中であるが、學術も世界學の世となつて

來たのである。我國のアッシリア・バビロニア學は實に寂寥々たるものであるが、そんな事では濟まなくなりさうである。勿論學術は一方に専門に分科しつつ精密を極めて行くが、一方却て其爲めに各科の成績を比較對照綜合しつつ該博にもなつて行つてゐるんだ。それ等各種の分科専門が存立してゐてくれなければ正確なる比較も廣博なる綜合も出て來ない。この點では我國の東洋學界はまだまだ狹隘である。各種分科の専門家が益々多い事が望ましい。これはアッシリア・バビロニア學の場合をのみ云つてゐるのでない。

然し元來我國は富裕でない。其爲め圖書館にしても學會にしても貧弱であるを免れない。學會や圖書館や少ない博物館では到底専門研究は望まれないから、學者自身が書物や資料を持たねばならなくなる。分科は狹隘になるより外ないが、學者自身にさう豊富を望めるものではない。窮極する所は特別の材料を珍藏して個人利己とならざるを得ない。大いなる協同綜合の研究とは縁遠くなる。我國の貧弱が致す所であるとは云へ、これでは霸氣ある壯烈なる研究とはなり得ないではないか。だと云つて敗戦疲敝の我國が急に富裕たるべきを得ないとすれば、衆力衆智を連絡活用するに問題は在らう。連絡活用となれば從來は大抵大なるものの様の下の方持に小なるものがされ勝である様だ。さうでない。量は小であつても質の良なるものに大なるものが援助するのがほんとうではなからうか。

例を我等の大阪にとつて見よう。大阪は學問の土地でないかも知れない。然し熱心な學徒はいつの時代でもゐるのである。我等の小さい學會も存在する。これ等の困ることは大なるものとの連絡活用がなくて活潑なる躍進は自力の蓄積のみであるから中々前途は遠しと云ふ外ない。アメリカなどの諸力を綜合して目的に邁進するを側聞しては驚くばかりである。驚いてばかり居られないから自力で邁進するつもりではあるが、之等を前進せしめ

之等を利用するのが大なるものの義務であらう。かくしてこそ我國東洋學の發達を期し得よう。大阪を例にとつたに過ぎないが、各地も大抵はさうであらうと信ずる。大阪に東洋學を不要と云ふ勿れ。國際理解に資し、歐米文化の營養に資し、國家の再建に資し得ることアメリカ學者の云ふが如くんば、なんで東洋學が不要であらう。西洋文明に寄與し得ることこそ世界平和に資し得る點ではないか。

アメリカ東洋學に就いて書いて見よと課題を與へられたが、知る所が少く聞く所も多くない上に、手元の材料は殆んどこれを缺いてゐるから、ただ涉獵し得る二三の参考文献による外なかつた。且は最後に大阪を例に引いて我田引水の觀なしとしない。然し大なり小なり我國の東洋學界はアメリカ東洋學界から學ぶべきものが多々有るように思はれる。所謂アメリカ時代の東洋學風はまだ完成してゐないかも知れないが、石田杜村先生の喝破せる如く、その規模の大なると選擇の組織的にして又近代的なるとは、傳統に煩はされてゐる傾きのある歐洲の遠く及ばざる所であり、之に加ふるに公私の蒐儲も世界に冠たるものがあり、今後若し得るに人を以てせばその力は計り易からざるものがあるのだ。東洋學のアメリカ時代とならないと誰が云ひ得やう。我國の東洋學界は今日に於てアメリカの東洋學界に一顧の勞をとるべきだと信ずる。ただ余なんかにはアメリカの東洋學を揣摩し得る資料を見聞し得る便宜と機會とに恵まれてゐないのが遺憾である。アメリカが我國に進駐してゐると云ふ事態を機縁として、それらの資料に接し得るに至らないものだらうか。遙かにアメリカの各方面の東洋學者に呼びかけて見たい氣がする。十年孤立の我が學界がかくて米國延いては歐洲學界とも連絡し得るに至らん事は希望に堪えない。孤立は獨善を生み落伍する。落伍してはいけないんだ。